

裁定者達の聖杯大戦

クルスク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かの外典には二人の裁定者が存在した。一人は極東の聖人、もう一人はフランスの聖
処女。

どちらが勝ったかは語るまい。だが、もしあそこに並行世界からの乱入者がいたとし
たら、どうなつていただろうか？

無論、ただの乱入者では荷が重いのは百も承知。特殊能力をもち、あまつさえ並行世
界で似たような事件をくぐりぬけてきた猛者だつたなら？

人間性は期待なさらず。裏切り、姦策、ヘタレに間抜け、保身第一、金にも汚い。思
い違いで馬鹿をなし、肝心要でドジをふむ。

はたしてそんなそれで何が変わるか？ 誰かの命かはたまた、信念か。
さあ、かの大戦を真に裁定するのは聖人か、それとも並行世界からの乱入者か。どう
ぞ皆さま、一つお付き合いのほどを。

目 次

プロローグ 異世界、並行世界ものと中
年男性の味付けは甚だよくない点につい
て

第一章 聖女様とお茶を 11

第二章 新派闇と判じ物について 1

38

第三章 ルーヴルにて歌え人間贊歌

64

プロローグ 異世界、並行世界ものと中年男性の味付けは甚だよくない点について は甚だよくない点について

パリの夜景、今ほど格安旅行が一般的ではなかつた時代において、実際の夜景をお目にかかることができるのは限られた人間ばかりだつた。

特に日本人においては、海外旅行など一生に一度のあるかないかのビックイベントだつたといつていい。

いい悪いは別としても、そういう時代に生まれてパリの夜景を見たならば、感動もまた格別だつたことだろう。

そんな事をぼんやりと考えながら、その男関根敬一郎はため息をついた。ここはパリの喫茶店。時刻はもう夜の七時を指す所。

といつても、これでは曖昧に過ぎようというもの、もう少し付け加えておく。グーグルマップによれば、現在位置はシテ島、かのノートルダム大聖堂近く、ガラス越しにセーヌ川がみえる、そこのこじんまりとした喫茶店ないに、関根はいた。

パツと見た限り、彼はどこにでもいる人物に見えた。紺色のスーツ、ズボン、ワイシャツにネクタイ、足元にはスーツケース。

細面の顔に眼鏡がよく似合つており、年は二十代後半（実際は三十きつかし）。見た限り出張中のサラリーマンといったところで、これといった特徴はない。それこそ、日本どころか韓国、中国で似たような人物は履いて捨てるほど見つけられるだろう。

ただ一点、特異な背景を除けば。

関根は晩飯の時間帯になり、そろそろこみつつある店内を眺め、次いで眼前のテーブルに置かれたサンドウイッチに手を伸ばした。正直食欲がないのだが、この際そもそも言つていられない。

関根はテーブルの上に放りだしたスマフォに目をやつた。先ほどから睨んでるのだが、ウンともすんともいいやしない。ああ、電源が入つてないわけではないのだ。充電はきちんとされている。にもかかわらず反応はなし。

一度試して絶望の淵に叩き込まれたのだが、それでももう一度勇気を振り絞つて関根はスマフォを操作した。登録している会社の同僚や友人、はては実家にも電話をかけてみる。

だが、かえつて来た反応は全て一つだった。

『おかげになつた電話番号は、現在使われておりません。番号をお確かめの上、もう一度おかけ直しください』

無機質な声が耳朶を打つ。

関根は再度ため息をつき、ズボンのポケットにスマフォをしまいこんだ。まさか、自分の知り合いすべてが機種変更に伴い電話番号を変更して、それをこつちに知らせてこなかつたなどという、吉良上野介（忠臣蔵の敵役）顔負けの苛めを敢行された、とはちよつと思えない。

携帯だつたら、どうにかできなくもないだろうが、会社や実家は不可能だ。特におんぼろな自宅を立て直した両親は、息子をいびる目的でこんなことやつてくださいと言われても拒否するだろう。

さて、では一体これはどういうことなのか。

実のところ、答えはとつくにでていたのだが、関根はそれを見ないようにしていたのである。関根敬一郎は並行世界の人間だつたのだ。

よつて、この世界に関根の知り合いは実質一人もいない。少なくとも現段階においては。

といつても、別に電子レンジ（仮）を使用したわけではない。

いや、関根からすればそつちのほうがましだつた。自分の知り合い全員いなくなつているなど、岡部倫太郎よりも条件がきついではないか。

挙句無職、そのうえでスタート地点は外国ときた。江ノ島盾子を呼んでこなくとも状

況は絶望的である。

ああ、なるほどスーツケースに幾ばくかの現金は入っていた。パスポートもある。しかし、だからどうしたというのだ？

こんな状態で履歴書になんて書けと？　まともな所は絶対に雇つてくれないではないか！

言いたくはないが、神様のミスでの異世界転生のほうがなんぼかましといえた。特典すらないのである。せめて、せめて駄女神くらいつけろや、くそが！　レムをよこせとめでは言わんからさあ！

関根はもぐもぐとサンドウイッチを食みつつ、独り語る。聞けば某出版社は近年あふれる異世界ものに悲鳴をあげ、作品募集要項に『異世界転生禁止』を盛り込み、若年層だけではなく関根のような中年男性をターゲットにしようと画策しているようだが、関根は前者はいいとして、後者はどうかと思つていた。

しかも、自分が実地で味わつて分かつた事なのだが、異世界転生も並行世界移動も、正直十代、二十代じゃないときつすぎるのだ。なぜかといえば、三十代になつてくると失うものがおおき過ぎる。

並行世界に飛ばされて、関根が最初に思つた事は友人のことでも両親のことでも、いわんや会社のことでもなく、『あれ？　これってまさか年金バー？』だった。

年金、そう、百年安心だのどうだと吠えていた例のあれ。ええ、払いましたよ。何だかんだ言つて親方日の丸なんだもの。それが何、一瞬でパー。あつという間にパー。もはや笑うしかない。

(もう、あれだ。明日からルーヴル美術館巡りして。うん、それから先のことはそれから考えよう)

人、それを現実逃避と呼ぶ。関根はすっかり冷めたコーヒーを口に運んだ。パリで飲むコーヒー、かつてならそれだけで感動の嵐に包まれたのだが、今の関根にはそれを味わう余裕もない。

無論、関根には元の世界に戻るよう努力する、そういう選択肢も存在していた。ただ、どういう訳かそういう思考法に関根はなかなか至らなかつた。なぜなら。

『関根敬一郎は、今一つ己が並行世界からやつてきたという自覚が薄かつた』
から。

うつすらとした記憶はあるのだ。妙な厄介ごとに巻き込まれた、それはぼんやりと覚えている。頭の中に切れ切れに『妖精』だの『理想郷』だのといった胡乱な単語が乱舞し、次いで金髪で若い男性が何を考えているのかよくわからない笑顔を浮かべつつ、『妖精たちが集まつて、×を完成させるのです。貴方は私達に任せて、ただ日々の生活を営んでいただければそれでよいのです。それだけで』、映像がそこで途切れた。

「あ――――――！」

周囲の客がぎよつとした顔で関根を見、店員も何事かとばかりに駆けつけてきて、関根は慌てて頭を下げた。思い出したのだ。どつからどうきいても新手の詐欺としか思えない馬鹿話に自分が乗った最大の理由！

（ちょ、また。あれも、あれもパー！　じょ、冗談だろ。あんな胡散臭い話にのつて。必死こいて。その挙句が！）

起死回生の一打になりうるもの、悠々自適の老後を約束してくるだけではなく、クソみたいな会社に辞表をたたきつけられる最強切り札。

大急ぎで関根はズボンのポケットからスマフォを取り出し、操作する。ギリッと関根は奥歯をかみしめた。やはりない、蘇ってきた記憶の中で確かに幾つかの事件があり、間違いなく新聞の紙面を騒がせていた。それらが完全に消え失せている。

怒りに任せて立ち上がりかけて、関根はこめかみに痛みを感じて大きく息を吸い込んだ。危ない、危ない。危うく妙な行動をとるところであつた。このこめかみの痛みは、そういう時まるでアラームのように、関根に自重を促してくれる。

関根は大きく息を吸い込んで、改めて考え込んだ。冷静になるべき場面だつた。まだ記憶がぼやけていて、うまく事件の輪郭が把握できない状態なのだ。

失つたものは大きいが、ひよつとして払うべき代償に比べればまだ安かつた可能性も

ある。即断は避けるべき場面だった。

(失ったものより、今あるものを大切にしないとな)

そうそう、何事も前向きに考えないと、関根は独り頷いた。

氣分を切り替えると、関根は急に空腹を感じた。どうもあれっぽつちのサンドウイッチでは足りなかつたらしい。改めてメニューを見てみると、喫茶店らしくケーキやサラダの写真も掲載されている。

甘党の関根にしてみれば、目移りしてきて困る場面といえた。舌なめずりしつつ、考え込む。ここは奮発するべき場面だろうか？　はたまた、明日のルーヴルに回すべきか？

しばし迷つたが、結局食欲が勝つた。何をするにもしつかりと栄養は取つておかないといけない。

店員を呼び、ケーキを注文しようとして……。

関根は首を傾げた。気づいたのだ。なんか店の視線が一つに集中している、と。

店員も客もその人物にくぎ付けになつていた。店の扉の前に、旅行鞄を持った少女が一人。誰かを探しているのか、きよろきよろと店内を見回している。

綺麗な子であった。年は十七かそこいらだろうか。金色の髪に清楚な感じで……。

(あれ？)

何だか見覚えがある気がした。どこかで、そうこつちに来る前にあつたことがあるようないような。

関根は必死に記憶の糸を手繰り寄せにかかる。しかし、どうにもうまくいかない。浮かんでくるのは、直接的な名前ではなく、漆黒の黒に……髑髏のマーク？
(おいおい、なんだよ、こいつは？)

妙だなど自分でも思う。しかし、どういう訳かイメージはそこで止まってしまう。関根はもう一度意識を集中させかけて……。

「あの」

「え？」

気が付くと先ほどの少女がすぐ近くまでやつてきていた。真剣な眼差しでこつちを見ている。

その視線の鋭さに、関根はちょっとどぎまぎした。内心もう五、六歳若かつたらなあ、勘違いしたうえで告白して玉砕するんだろうけど、などと比企谷八幡ネタを脳内で展開する。

が、馬鹿な事を考える傍ら、ふと関根は気づいた。ひょっとすると、この子、自分のことを知っているのではないか、と。

関根は努めて何でもない顔をしつつ言つた。

「なんでしょうか？ 申し訳ないんですが、覚えがありません。どこかでお会いした事ありましたつけ？」

丁重な口調で問い合わせる。が、関根が抱いた期待はあつさりと打ち砕かれた。

「いいえ、初対面です」

バツサリそういうわれ、思わず関根は顔面をテーブルに打ち付けそうになる。

(なんやねん、それ)

胸中で関西弁でつぶやく。しかし、こうなるといきなり何で声をかけられたのかわからなかつた。新手のナンパとも思えないし。

だが、この時点ではまだましだつたのである。

関根敬一郎が眞の意味で頭を抱える事になるのは、ここから先。

意を決したように、少女は言つた。背筋はまつすぐ、意思の強い瞳。惚れ惚れするような姿勢でもつて。

「私は今次聖杯大戦の裁定者、ルーラー、ジャンヌ・ダルク。奇妙な気配を感じ、ここにやつてきました。その気配は貴方から発されています。どういうことでしょうか？ お話を伺いたいのですが」

「はあ？」

久しぶりに関根は鳩が豆鉄砲を食らう、という表現を思い浮かべた。きっと、自分は

そういう顔をしているのだろうと自覚しながら。

これが、後日数奇な運命に翻弄されることになる、関根敬一郎とルーラー、ジャンヌ・ダルクとの初顔合わせであり、この瞬間から、大戦は奇妙な歪みを生じさせることとなる。

なお、ルーラー、ジャンヌ・ダルクは依り代レティシアの手を借り、大戦に関するメモを幾つか残しており、その中には関根敬一郎の印象も含まれていた。いわく。
『初対面での印象は、どう見ても凡庸そうな人物。その一言につきた』
と。

第一章 聖女様とお茶を

『どう見ても凡庸そうな人物。その一言につきた』

後に関根敬一郎に関する印象を、聖処女ジャンヌ・ダルクはそう書き残している。

そもそも、ジャンヌ自身ここに来るつもりはなかつた。夜行バスで空港に移動し、即座に大戦の舞台であるルーマニアに飛ぶ、そう決めていた彼女は、しかし、何かを感じてそこで立ち止まつた。いな、こう記すべきかもしない。立ち止まつてしまつた、と。

確かにここがキーポイントだつた。もしこの時、彼女が無視してルーマニアに直行していれば。関根も、そしてもう一人のイレギュラーも、完全に封殺することができたかもしれない。

だが、事態はそうはならず、迷つたジャンヌは近くの宿にとまり、翌日パリの散策を開始した。その結果、彼女の足はシテ島に向き、ここに並行世界からやつてきた中年男性、関根敬一郎と顔を合わせることとなる。

正直、最初顔を見合わせたジャンヌの感想は拍子抜け、期待外れといったものだつた。妙な気配を漂わせてはいる。それが魔力によるものなのかどうかは不透明だが、ポカン

とした顔でこちらを眺めているその顔はどう見ても大それた事を考へてゐるようには見えない。

無論、印象だけで判断するのはよくないことだと、ジャンヌは理解している。笑顔が似合い、人的魅力が大溢している殺人鬼なんぞ、史書を紐解けば幾らでも見つけられるのだから。

それに第一、彼女の現状を鑑みれば、妙な事が起こっているのは確実であつた。憑依状態での顕現なんぞ、通常あり得ないのだ。それが起きている以上、何かしら妙な事が起きているのは明らか。そうである以上、疑惑の種は早期につぶしておく必要がある。

しかし、どうも話していく要領が得ない。目の前の人物、日本人の『関根敬一郎』といいうらしいのだが、『せーはいたいせん?』、『えいれい? なにそれ?』と呟くばかり。苛立つたジャンヌは、ややきつい口調で何が起こりつつあるのかを説明した。その結果、関根はしばし黙り込み、次にコーヒーのお代わりをした後、言つた。

「あのさ、ジャンヌさん、だつけ? こういう事は本来親か教師、最低でも身近な人間が言うべきなんだろうけど、袖振れ合うのも多生の縁つて言葉が日本にあるから、いうね」そこで関根は嫌そうに顔をしかめて

「きつい事いうけど、君頭おかしい」
「は?」

（ああ、言っちゃった）
 一瞬、ジャンヌは何を言われたのか分からなかつた。今、何と？

関根は内心でため息をついた。こう言つてはなんだが、ここまで言う気はなかつた。どちらかといえば、関根は目の前のジャンヌという少女に対し、感嘆の念を抱いていた。話している内容はよくあるネット小説のそれだし、世界の危機に発展しかねない一大魔術儀式、自分が審判役を仰せつかつてているといった優遇措置、こういつてはなんだがどこぞのオカルト雑誌における『前世で別れた戦友をさがしています』レベルにしか聞こえず、これが男子だつたら、無言で頭はつたおして『寝言は寝てからいえ、バーカ』の一言で終了であつたろう。

と、ここまで考えて関根は気づいた。

店員も客も、こんな電波むき出しの会話をしているのにもかかわらず、誰一人として不審な目を向けようとしないのだ。あたかも聞こえていないかのよう。

それに気づいた瞬間、関根は全ての絡繰りが解けるのを感じた。

なんの事はない。目の前に座っている自称ジャンヌ・ダルクちゃんはこの店の常連さんなのだ。大方以前からこういった電波がかつた話を客や店員に延々と繰り返してきたのだろう。

ここまで解ければ、どうして先に入ってきただけで店の視線が集中したのか理解でき

るし、彼女がまっすぐ関根のもとにやつてきた理由も、また判明する。

客も店員もあしらい方がうまくなってしまい、ジャンヌちゃんは新鮮な反応に飢えていたのだろう。行きつけの店にやつてきたら、折よく外国人の客がいた。で、いつも通りの会話を開始して、というわけだ。

関根は頭が痛くなつてくるのを感じたが、反面先に記したように感嘆の念も抱いた。日本において妄想を抱く人間は数多くいる。しかし、その多くはネットに書き込むばかりで、実際に行動してみようとはしない。

こんな風に店員やお客さんからも認められ、外国人相手に妄想を延々と語りたおす。彼女を笑う事は容易い、迷惑だと批判するのも簡単だ。しかし、ならば批判している人が彼女と同じような行動をとれるのかと聞かれたら？

大半の日本人は沈黙するのではないだろうか。少なくとも、十代の頃の関根には到底無理な注文だった。おそらく、外国人に声をかける前に顔を真つ赤にして逃走しておしまいだらう。

大したものだつた。弁説の才、行動力、そこで終わつていれば、関根とて曖昧な笑みを浮かべつつ、適當な相槌を打つて平穩に事を収めてもやぶさかではなかつた。が、話がルーマニアに行かねばならない、という辺りで流石に看過できないものを感じた。まあ、それも何かのイベントで、旅費や滞在費はきちんとどこぞの運営が持つて

くれていて、なら分かるのだが、聞けば自腹と言い出す。
 （おいおい！）

挙句、参加者のプロフィールは手に入れていない。双方の陣営、ユグド何とかとかいう、いかにも中二くさい団体と魔術師達の陣営との連絡手段はなし。なんか聖堂教会と、あと時計塔とかいう組織もかかわっているらしいが、そつちにも連絡をとれないらしい。

これで審判役だのなんだのと言われても、困惑するしかない。

それでもまあ、個人で納得してやつてているというなら、関根もギリギリ理解できなくはなかつた。はた目には青春と能力の浪費にしか感じられないことでも、当の本人にはかけがえのないものに感じられる瞬間があることは、過ぎ去つてしまつたがゆえに関根もよくわかつていたからだ。

だが、『自分は憑依状態で、元の人格のレティシアは眠つている』云々で、関根の忍耐も限界を迎えた。念のために、学生証を見せてもらうと、確かにそこには別人の名が乗つっていた。

……親が痛いDQNネーム付けた勘違いちゃんかあるいは自称かと思つてはいたが、実際見せられるとダメージがきつすぎる。

関根は泣きそうになつた。変な話だが、胡散臭い男が誠実さの欠片もなく、どこから

どう聞いても詐欺話としか思えない馬鹿話をまくしたてても、取り立てて不快感を覚えないのだが、美少女にそれをやられるなどうにもこうにもいたたまれない気分になつてしまふ。あと、それだけではなく。

『いつまでもまし顔のまんま過ぎすつもりだよ。いい加減舞台に上つたらどうだ？ うずうずしてんだろうが、おい！』

昔どこかの誰かにそんな風にけしかけられたような思い出が、脳裏をよぎつたせいかもしれない。

(関係ない、はずんだけど)

そんなことを思いつつ、関根は先の言葉を眼前の自称『聖女』さまにたきつけた。そうして続ける。

「あのね、大人しく帰つた方がいい。言いたくないけど、流石にやり過ぎ。地元で遊んでいる限りだつたら、別に目くじら立てずにほつとこうかなと思つたけど、女の子の一人旅、挙句外国までつてなると話が違つてくる。今から学校に連絡する。タクシーも呼ぶ。ああ、心配しなくともその程度だすから。ゆっくり休んで、友達や先生に愚痴を吐けば」

「貴方は……、さつきから何を言つてゐるのですか？」

眉宇が曇るどころの話ではない。ジャンヌのまなざしに宿る感情は、あたかも背信者

を見つめるそれ（あくまで関根目線）。関根はため息をついた。そういう反応が返つてくるのは予期していたので、ショックはあまりないがそれでも心は痛む。男だつたら、遠慮なく横面張り倒せたのに。

関根の無言をどうとつたかしらないが、ジャンヌは続けた。

「明らかにおかしい。関根、さんでしたか？」

「呼び捨てでいいよ。こつちはジャンヌ……さんでいい？」

「いえ、こちらも呼び捨てで結構です。あるいはルーラーと」

「役職名はちょっと味気ないさね。できれば、さん付を許していただきたく」

「なら、それで」

柔らかく笑うジャンヌ。その笑顔はどこまでも柔らかで、出るどこ出たら下手なアイドルよりもファンがつきそうと関根は思つたほどである。

しかし、その口から出た言葉は、またしても関根に頭を抱えさせるものだつた。いわく、自分にはルーラー（裁定者）として、他者に己の言葉を信じさせる力を授かつているとの事。

「えーっと、あれ、変だね。俺にはちつともきいてない気がするんだけど？」

関根は自分の顔が引きつるのを感じた。よもやスキルまで持ち出してこようとはちよつと思つていなかつた。おまけに何その、会社員が血涙流してほしがるスキル。

あ、別に政治家でもいいか。まあ、ジャンヌ・ダルクにはふさわしいスキルと言えたが。「はい、ですから先ほどおかしいと。やはり貴方には何かあるようですね。申し訳ないですが、同行してもらえますか?」

「……ルーマニアまでついてこい、と。いいよ、そのユグ何とかと連絡が取れて、お偉い魔術師さんや教会、はては時計塔と連絡がついて、なおかつ宿の手配や旅費もしつかりと確保できたらね」

「現状、そういうたものに時間をかけている暇はありません。移動しつつ入手するしか」「あつそ、じやあ、俺いかないから。確保できたら呼んでね。行くかどうかはそれから検討する」

パキンっと何かが割れる音がした。ついさっきまであつた和やかな雰囲気が雲散霧消するのを関根は感じた。

「……何を言っているのですか、貴方は?」

絶対零度の聲音。それを受けつつ、関根は内心でため息をついた。まだわかつてないのか、この子。一応こつちは譲歩してみせたのだが。

「何つてそのまんまの意味。悪いけど、現状君は俺に何も示せてない。さつき語つてくれた内容はどこぞのネット小説にありがちな展開だし、証拠、物証零。全部君の妄想つてことも考えられる。そのうえ君と俺はこれが初対面。恋人同士つてんなら、彼女の馬

鹿な妄想に付き合うのも絵になるだろうし、そそられなくもないけど、そういう訳でもない。よつて俺にしてみれば、動く義理も理由も見当たらない。だから悪いけど、同行は拒否させてもらう。あとさ、余計なお世話だろうけど、幾ら体借りてるからって他人様の財布に手を突っ込むのはどうかと思うよ。ああ、レティシアって子に許可とつてるのはわかつてることださ

これがギリギリだつた。ジャンヌの話を信じたわけではないが、それでも関根は『何らかの確たる証拠を見せてくれば、動くのはやぶさかではない』と明言したのだ。

もう『帰れ』とは言つていない。連絡先を交換し、大人しく席を立ち、確たる物証を用意してくれていれば。

ああ、関根の物言いもよくなかったのも事実である。あまりにもそつけなさ過ぎたし、ある種挑発的な色合いも濃かつた。

関根もその点を自覚してはいたのだが、どうしてそんな風に言つてしまつたのか正確に把握する前に、口が動いていたのであつた。そして、それがこの会話において致命的な破綻を呼び起すこととなる。

ジャンヌは苛立つた口調で言った。

「貴方は世界の窮地をなんだと思っているのですか！　さつき説明した通りだからそれじやあ、動くわけにはいかないってさつき説明しただろが！」

関根は先ほどから腹中に渦巻きつつある感情に手を焼いていた。まずい、それが正直な感想。このままいくとどんな事になる。ここは大人しく、目の前の少女をうまくあしらわないと。

そう思うのだが、腹の中に生じた何かが強制的に関根の口を動かしつつあつた。厄介な事に、それは偽らざる関根の本音。だが、ぶちまけるにはまず過ぎる代物。しかし、もう止まらない。

関根はコーヒーカップに手を伸ばすが、それより先に口が動いた。

「あのさ、こういう事言いたくないんだけどね。俺、君の本来の人格、レティシアって子が矢面に立つようだつたら、素直にいう事聞いたと思うんだ。多少の不備には目をつむつてね」

言つてどうする！　しかし、もう止まらない。

「いいじやん。非力な少女が世界を救う、恰好いいじやん。夢もつて何が悪い。すました面して、誰でも語れる現実の冷たさ語るよりは、妄想だろうが何だろうがかつとんではる行動や言葉を放つ女の子の方が百倍魅力的だよ。ああ、何が気に入らないのかようやくわかつってきた。ごめん、ジャンヌさん。貴方が表立つて動いてるのが、俺気に入らないんだわ」

「何を……いつているんです？」

理解しがたい、そう言いたげなジャンヌに、関根は笑いかける。

「悲しいって言つての！ とんでもなく魅力的な子と出会えたつてのに、その子が振りかざしたのは何百年前に処刑された聖女様ときた。周り見てみなよ、君のスキルか、ああ、こいつは確かにスキル（技能）だわな。君はここまでやつてのけたんだぜ？ 店員さんもお客さんも、誰もくすくす笑わない、当然のように君のことを受け入れてくれている。そいつは優しさの発露かもしれない。でも反面、君がしてのけた結果でもあるんだよ。そいつの証明に担ぎ上げたのは、聖女様の持つ力？ どうしてそこでそうなるのかなあ、さっぱりわからない！ あのさ、レティシアって子に聞こえてるなら、伝えてくれない。『聖女様に頼るな！ 君が表に出てきて、君がやんな』って。その方がきつとずっと、何倍も楽しいはずだし、俺はそっちの方が見てみたいと痛切におもうね！」

「関根！ 貴方は誤解している、いえ、根本的な所でサーヴァントのこと理解していくせん。彼らは……」

「御託は結構。八つ当たりかもしれないけど言わせてもらう。さつき言つた通り、いい加減なん百年前に処刑された聖女様を表にだすなつての。そんなの出してこなきや世界の危機が救えませんつていうのなら」

さばつと滅んじまつたほうが、まだ美しいや、そう思うね。

次に関根が感じたのは、左頬に衝撃と悲鳴。あ、やっぱりこうなつたかと独り語る。

世界を救わんとする聖女様に向かつて、『あんたが出てくるようなら、世界なんざ滅んじまつたほうがいいさね』と吠えりや、そりやねえ。

(しかし、この子手首のスナップ利かすのがうまいなあ)

妙な所で感心し、ぐわんぐわんと揺れる頭を何とか支える。みると第二撃が迫りつつある模様。あ、流石にもう一発は勘弁と思つた関根は、何とかルーラーの手首をつかんだ。

これができたのもそうとうジヤンヌが手加減したが故だつたといつていい。本気でぶんぬぐつていたら、関根の命はここで終了となつた事だろう。聖女なら、いな、己の力を正確に把握している人物の当然の配慮、だが、それが事態を妙な方向に捻じ曲げることとなる。

「……言い過ぎたと思うから、一発は殴られるのもしようがないかなと思う。でも、先の発言はまさごうことなき本音だよ。さあ、ジヤンヌ、いや、ここはあえてレティシアさんつて呼んだ方がいいかな？　君の返答は？」

ん？　言いつつ、関根は自分の左手に異常を見出した。いつの間にか左手首の先から手を覆うように赤い布が巻き付いている。こんなもん、いつ付けた？　いや、何か見覚えがあるようなないような。

左手の手のひらに妙な熱を感じると同時に、目の前のジヤンヌ・ダルクと名乗つた

少女の体がガクツと体を震わせ、

「え？」

がちゃんとまるで冗談のように、ジャンヌは机の上に倒れこんだ。あたかも電池が切れたかのように。カップや、皿が床に落ち、周囲の視線と悲鳴と混ざり合つて……。

「え？　え？」

次の瞬間、関根は肩をつかまれ、地面にたたきつけられた。見ると、客の何人かがのしかかつてくるのが分かつた。

（ああ、何かしたと思われた訳ね）

客観的に見る限りまさにその通り。だが、その瞬間、関根の耳は誰かが遠くでけたたましい哄笑をあげたのを、確かに聞いたような気がした。してやつたり、そう言いたげな満足そうな響きをさせながら。

三十分後、関根は解放された。客の何人かがやり取りを見ており、先に手を出したのは少女（ルーラー）の方で、どうも痴話喧嘩の最中に貧血を起こしたと思われたらしい。幸い外傷はないし、カップその他の損害については関根が払つた。こういうのがボディブローのようにじわじわときいてくるのはわかっているのだが、さりとて出さない訳にはいかない。うん、正直理不尽だと思うのだが、よく考えれば貯金と年金と友人、職を完全に失うという、社会人としてはウルトラスーパー理不尽をくらうと、カップや皿

の代金払う程度は『まあ、ましかな』と思えてくるのが不思議だつた。

「おい、あの子気が付いたみたいだぞ」

店員（男性）の声。店の奥で介抱されていたルーラーは目を覚ましたらしい。この店員、ありがたい事に英語が堪能で意思疎通も問題なく行える。関根は後片付けを手伝つていた手を休め、伸びをした。店はもう落ち着きを取り戻している。

関根がやつてきた店員に笑いかけると、店員はいいつてことよと言わんばかりに手を振り、ついで言つた。

「なあ、妙な事聞くようだがあの子」

そこでちよつといいよどむ、関根は先を促すよう首をかしげると、店員は意を決した
ように

「入ってきた時とさつきあんたと話している時は、背後が光つてゐるというか、何だかおかしがたいオーラみたいなものを発してたように感じられたんだが、今見てみるとそうでもなくて……。どこにでもいる女の子みたいでさ。ちよつと拍子抜けしちまつた」

「そうかなあ、俺にはあんまりそつは思えなかつたけど」

そこで関根はあることに気づいて問い合わせた。

「あれ？ あの子こここの常連じやないの？」

店員は驚き顔で言つた。

「ええっ！ 彼女がそういったのかい？ いや、俺はここに勤めて三年になるが、今日初めて見たぜ」

「ん？」と関根は疑問を感じたが、よく考えれば時間帯の関係で会わなかつただけかもしれない。

関根のまなざしから、何をどう思つたのかわかつたらしい店員はむきになつた口調で言つた。

「確かに時間帯の関係で俺とは常にすれ違ひになつていた可能性はある！ しかし、あれだけ目立つ子なんだから、来ていたら店員の間で絶対に噂になつていたはずだよ」

一理ある意見だつた。だが。

「……ちよつとまつてくれ。あの子、いつもああいう電波話を客、店員に延々と語つて聞かせる困り者で、今日だつて周囲の誰もが何も言わなかつたのも」

「あんた大丈夫か？ 電波話？」なんの話だ。あんたら一言だつてそんな話はしてなかつたじやないか！」

もはや関根は啞然とするしかなかつた。だつて、聖杯大戦だの、サーヴァントだのといつたもつともアレな部分を話している最中に、コーヒーのお代わりを持つてきてくれたのは、この店員だつたからだ。

「あの、確かコーヒーのお代わりもつてきてくれたよな。その時俺たち、何の話ををしてた

？」

「……あんた本当に病院行つた方がいいんじゃないか？　あの子が学校での最近あつたことを話して、あんたは相槌を打つていた、だよ。電波話なんて一言も出てこなかつた」嘘だ、と関根は胸中で叫んだ。しかし、店員の顔が嘘をついているように見えていた。「そもそも嘘をつくメリットが存在しない。

では、これは一体どういうことなのか？

関根の脳裏についさつき彼女が語つた電波話が蘇つてきた。魔術だのどうだのとう、よく聞くおとぎ話。そんな連中だつたら、認識をずらし、聞いたことさえもその場で忘れさせるか、あるいは別の話にすり替えることができるかもしれない。

(まさか、ね)

関根は苦笑とともにその考えを葬つた。大方、庇つてゐるのだろう。まあ、見ず知らずの外国人と、自国の婦女子、関根だつて後者に加担するのにやぶさかではない。

若干、こういう態度どるから痴漢冤罪が生まれるんじやなかろうかという思考が頭をよぎつたが、無視することにする。それはそれ、これはこれである。

「で、あんた何で叩かれたんだ？　悪くない雰囲気に見えたんだが？」

悪戯っぽく店員にそう問い合わせられて、関根は肩をすくめて言つた。

「何、旅行に誘われたんだけど、断つたんだよ。それで、ああなつた」

「ほう、なんとまあ！」

どことなく非難するような眼差しが突き刺さる。関根は目を細め、困惑顔を作つていった。

「いきなり切り出されても、こつちだつて色々抱えてるもんでね。まあ、ちよつと自分の思い込みで突つ走りがちな所があるから、あの子」

嘘はついていない。そうして関根は続けた。

「おまけに学校も勝手に抜け出してきたの何だのと言われちゃあね。見過ごせないよ、幾ら楽しみにしてたって、ちよつと限度を超えてる」

「そいつはまた！ しかし、あんたの良識は褒められるべきものかもしれないが、ちよつとやばいんじゃないか？ 下手すりや破局へ一直線だぞ？」

心配しているのか面白がっているのか、いささか判断がつきかねる店員のセリフに、関根は表情を変えずに

「うまくやるさ」

どうせ駄目でも別に構わないわけだし。そんな関根の内心を知る由もなく、店員は面白いと言いたげな笑みを口元に浮かべ言つた。

「大した自信だな。根拠はあるのか？」

「別にない。ただそうだな、あえて言うなら」

ちよつと格好つけたくなつた関根は、出来るだけ自信にあふれた笑みを作つていつた。

「美少女や美女の為に苦労するのは嫌いじゃないんでね」

普ツと店員は小さく噴き出し……次いで腹を抱えて笑い出した。不思議と関根は不愉快は感じなかつた。くさいセリフを吐いている自覚は充分にあつたわけだから。

「な、なるほどね。くくく、あんた面白いな」

関根は右手で首筋をかき、そこで先の異常事態を思い出した。あの時、左手に巻き付いていた赤い布。改めて左手を見てみると、そこには何もなかつた。あたかも、あの瞬間だけ現れた特殊アイテムのよう。

(イベント発生、かよ)

ひよつとして何かの見間違いだつたのだろうか。その可能性はかなりある。妙な電波話聞いたんで、おまけにどこぞの勇者様よろしく、わずかな所持金だけで放り出され、何もかも失つてしまつたから、自分の想像以上に精神がまいつていた。

要素は山ほどある。だが、それだけではなく、関根は妙にあの赤い布が気になつてた。あれが厄介ごとの根幹に関わっていた、そんな気がしてならないのだ。

『ええ、それです。それがあればあの連中に対抗できる。真の×は我々のものだ!』

なんかどこぞの分かりやすい悪役のようなセリフをどこかで聞いたような気がして。

意識を集中する。明らかにおかしかつた。どうしてこうも記憶が虫食い状態なのか。肝心要の部分がぼやけている。その理由を自分はよく知っている気がしているのだが、どうにも思い出せない。

気が付いたら喫茶店前にたたずんでいた。そうして腹の虫がなき、店に入つてテープルにつき、コーヒーに手を伸ばした所で、ここが外国だとわかつてそして、スマフォオを操作したら、自分はこの世界に存在しない事が分かつた。

わかつたというより、あれは確認に近い。薄々そうだとわかつっていたのだ。だつて。（だつて、だつて何だよ？）

内なる己に問いかける。そうして閥根はとある事実に思い当たり、笑い出しそうになつた。

なんだ、これではあの少女を笑えない。自分も充分妄想過多ではないか。いつそこの設定で小説でも書いたらどうだろうか？ 全く馬鹿馬鹿しい。その瞬間、肺腑の奥から黒い声がした。あたかも、遅れてきた返信のように。

『だつてお前通報されなかつたじやないか？』

「あ？」

意味が分からぬ。いや、述べている内容は理解できるのだが、覚えが……。「あれ？」

心のどこかで納得している自分がいる。関根は戦慄した。まさかの統合失調症発病？　おいおい、自称聖女様にあてられて、神の声が聞こえるようになりましたかつて？

関根はそこで考えを打ち切つた。本格的に疲れてるなで、己をごまかす。

店員が心配そうにこつちをみてるので、笑つて、小学校の頃、母親が授業参観の際、自分の授業態度を評した言葉、

『魂が飛んでた』

という、訳の分からぬ言い訳をかます。

それでも憂い顔が晴れないところをみると、相当ひどい顔をしていたらしい。関根はどうしたもんかと頭を悩ませていると、奥からルーラーが出てきた。
足取りはしつかりしている。

関根はこれ幸いと声をかけた。

「あ、大丈夫。病院とか行かなくていい？」

こくんとルーラーが頷く、顔色は悪くない。いや、あの時も直前まで調子が悪そうには見えなかつた。今もそうだし、見た限り足取りもしつかりしている。
ただし。

(あ、本当だ。言われてみれば、何か雰囲気が違う)

あの強烈な意思を感じさせる瞳は、今や年相応のモノへと、いや、むしろびくついた

感じに変化していた。まるで親からはぐれた子供のよう。

そういう目をされると、関根は若干ではない罪悪感を感じてしまう。ここは努めて優しく接するべきか、そんな風に考えていると、先にルーラーの方が口を開いた。

「ご迷惑をおかけしました。その、聖女様は、どこかに行かれたのでしょうか？ 目が覚めたら、どこにも感じられなくて」

きよどんとする店員をしり目に、関根は言つた。

「改めまして、こんにちは。確か、レティシアさんだつけ。今日はもう帰つた方がいいよ。あ、寄宿学校まで結構距離あるんだつけ？ 適当な宿でもあればいいんだけど」

関根がスマフォで宿を探そうとすると、店員が言つた。

「お、そういう事なら、いい場所知つてるぜ。従兄が経営しているホテルなんだが。今なら格安だ。どうだい？」

妙な話になつた。関根だけならその話に乗つてもよかつたのだが。ルーラーこみだとさて、どうしたもんか。しかし、任せてそこがろくでもないホテルだつた場合、寝覚めが悪い事この上ない。

関根は頭を何度もかかくといつた。

「ええと、それじゃあ、お願ひ出来る？ レティシアさんもそれでいいかな？」

「こんどジャンヌは、いや、もうこの少女は聖女ジャンヌ・ダルクではない。ただの

平凡な少女レティシアなのだろう。

そこはかとなく落胆の念を覚えつつも、関根はてきぱきと段取りを進めた。タクシーを呼び、先にレティシアを外に出す。

関根はスーツケースとレティシアが持つてきた旅行鞄を手に取つた。ため息つきつつ、外に出ようとして、店員に呼び止められた。

「おい、あんた。忘れ物だぜ？」

ひよいと突き出されたのは、こぎれいな紙の箱。中を覗き見るとイチゴが乗つたカツプケーキが二つ。

「後で彼女と食べろよ。仲直りにはその手の小道具が一番だ」

何か誤解している。関根はしかし、その疑念を晴らすことなく、黙つて箱を受け取つた。正直、こういう処置されると凄くうれしくなつてしまふ。

「ありがとう。また来るよ」

「おう、ぜひ来てくれよな。待つてるぜ」

そういうつて関根と店員は別れた。出る際に一度店の名を確認しておく。

『エリュシオン』

日本で見たら噴き出すだろうその店名も、不思議とパリではよく映えているように見えた。

こうして店の前にやつてきたタクシーに乗り込み、関根とレティシアは宿に向かつた。双方無言。宿は喫茶店から二十分ほどはしつた所にあつた。二階建ての古いつくりで不愛想な受付の老人に鍵をもらい二人は無言のまま部屋に向かつた。意外にも店内の清掃は行き届いており、通された部屋も小部屋だが、悪くはなかつた。

あるのはベッドに机。そしてテレビ。

いうまでもなく、レティシアと関根の部屋は別々である。関根は、渡されたカツプケーキは二つともルーラーに押し付けた。まあ、惜しくはあるが別に構うまい。

部屋に入り、関根は無言でベッドにダイブした。疲れた、その一言に尽きる。それでも視界の隅で、放り出したアタッシュケースが目に入った。ああ、そういうや中身まだよく確認してなかつたな、と思いのろのろと立ち上がり開けてみる。パスポート、衣類、デジカメに、小型のビデオカメラ。

どこからどう見ても、平凡な旅行者の持ち物、それ以外の何物でもなかつた。改めて確認してみても、ため息しか出でこない。

ちらりと脳裏に『デジカメやビデオカメラ見てみたら、何か映つてるかもしね』といふ考えが脳裏をよぎつたが、疲れていたので翌日にすることにした。なお、後になつてみるとここも一つのキーポイントだったのである。

結論から言うと、後日一騒動あり、関根はデジカメとビデオカメラの確認を怠つたば

かりか、結局見ないまま、デジカメは別としてビデオカメラはとある人物の手に渡る事となる。その結果、関根はのつびきならない状況に追いやられる事になるのだが、それは後の話。

「疲れた、ああもう、死ぬほど疲れた」

その一言とともに、関根の意識は闇に沈んでいった。

隣の部屋では、少女が一心不乱に祈っていた、その身を貸した聖女の声をもう一度きかんと欲して。

翌日、よれつとした格好の関根と、目の下に隈をこさえたレティシアはホテルのロビーで再び顔を合わせた。朝食はまだ、ただ何となく居心地が悪くて出てきたところを、ばつたり顔を合わせた、そんな感じだった。

双方とも顔を見合せた瞬間、互いに

「あっ！」

と呟く。

あたかもそういうえば同じ宿に泊まつてたつて？ と初めてそのことに思い至つたかのように。

しばし、無言で相手の顔を眺めていた二人だつたが、やがて。

「えーと、その、ご迷惑をおかけしました。私、学校の方に帰ろうと思います」

ぺこんつと頭を下げられ、関根の方が慌てた。

「え、あ、そうなの？ うん」

よく考えれば他に選択肢ないよなとすぐわかりそうなものだが、起きぬけなもので、関根は間抜け極まりない返答を返す。

「……」

しばらく沈黙がロビーを支配した。よく考えてみれば、そんなに喋ることがない。そもそもそんなに深い間柄でもないのだからそれも当然か。

「あの！」

「はい？」

いきなり声をかけられて、間抜け返答二回目。

だが、少女の眼を見た瞬間、関根は居住まいをただした。しつかりとした意思を持つた瞳。それはあの時、喫茶店に入ってきたあの瞬間に比べれば見劣りはしたが、確かに僅かながらも『聖女様』を彷彿とさせる何かが宿っていた。

「私にも、出来ると思いますか？ その、世界を救うというか、何かできるというか」

言つてるうちに、自分の発言のあやふやさに気づいたのか赤面するレティシアに対し、関根は右手であごを撫でた。

（何言つてんだろ、この子？）

どうも二重人格の可能性がある。といつても、この漫画、小説や映画で幾度も使用されている高名な病気について、実際関根はお目にかかることがないので、判断がつかないところがあつたが。

「できるんじゃないの？」君はああだこうだ言われるかもしれないけれど、行動を起させたんだから。批判する奴や馬鹿にする奴なんて幾らでもいるかもしれないけど。でも」

『座つたまま、あるいは動かずに栄光を手に入れた奴なんて聞いたこともない』
なんて呟えたのは一体誰だったか。

「少なくとも批判だけしている奴や馬鹿にしている奴よりは、君の話に耳を傾けたいと俺は思うね。だからまあ、俺が言つても説得力零だろうけど

『救えるよ、君の手でね。案外簡単かもよ、世界を救うなんて、さ』

別に関根にも確信があつての発言ではない。ただ単に思つた事を素直に口にしただけの事。

それでも、目の前の少女には何かしら感銘を与えることができたらしく、嬉しそうに笑うとペコンと少女は頭を下げた。

「では、またどこかで」

朝食はいいの？ とか、いや、もう会うことないと思うけど、などと思いつつも、関

根は軽い調子で応じた。

「ああ、またね」

「あ、最後にこれを」

そう言つて少女が関根に手渡したのは、見覚えのある紙の箱。中に入っていたのは一つ残つたカップケーキ。

関根はやられたと一言呟き言つた。

「お見事。それじゃあ」

「はい、では」

こうして、最初の顔合わせは終わつた。流れは変わり、舞台に上がるはずの主演女優は、まずもつて客席に戻つてしまつた。

これが例の大戦にどういう影響を与えるのか。そもそも地味に世界を窮屈に追いやりつつあるイレギュラー関根敬一郎は、今後どう動くつもりなのか。

それを語るは次回の話。

第二章 新派閥と判じ物について

『世界なんて簡単に救えるよ』なんてほえた関根敬一郎は、世界を救わんとした聖女を舞台から追つ払い、地味に世界を窮地に追いやりつつあった。

で、当の本人はどうしたのかというと、まだフランスのパリにいた。

いやあ、だつて動く理由ないし。

あの後、ジャンヌというかレティシアを見送った後、関根がやつた事と言えば、もう一度部屋に戻つて二度寝する事だつた。

『全日本もう帰りたい協会』会員である関根には、機会をとらえてお布団に帰還する義務があつた。まあ、現状は布団というよりベッドだつたが。

朝食は軽くパンを啄み、関根は再度ベッドに身を投げ出した。

お昼まで惰眠をむさぼり、ゆっくりと起きあがる。

服のよれよれはもはや弁解不可能なレベルにまで達しつつあつたが、しつた事ではない。

二度寝する事で、何とか気力を回復させ、さてどないしょと関根は頭を振つた。

ルーヴルその他の美術館を巡るのは確定だとしても、二度寝したぼんやりした脳味噌

と眼で名画を見るというのは、いささか失礼ではないだろうか。

やはりこういうのは万全の体調で挑むのが礼節と言うものではないだろうか。

次はいつこれるか分からぬ訳だし、よし、そうしよう。

関根は決断を下した。さて、そうなると今日はどうするか、そういう問題になる。一応念のために新聞を部屋にもつてきて貰つて、一通り眺めてみた。

見た感じ、色々起こっているようだが、ルーマニア関係は平穏無事っぽい。

あ、日本で何か連續殺人事件、現代に蘇つたジャック・ザ・リッパーとかいうのが起きてるらしいが、これはあんまり関係なさそう。

(結論、昨日も世界は平和でございました、と)

実は現在進行形でまずい事態になつていたのだが、関根に分かる訳がなかつた。いや、九割九分九厘こいつが悪いのだが。

自覺症状のない馬鹿というのは手に負えないという見本と言うべきか。

テレビをつけるのも何だし、外に繰り出すか、それともと関根が悩んでいると、ボイイが部屋にやつてきていうには、清掃の為にもう少ししたら部屋を空けてほしいとの事。

関根は近くの、ボーイが旨いと感じるカフェの場所を聞き、その際ちよつと尋ねてみた。

昨日のジャンヌの会話に出来てた魔術儀式、『聖杯大戦』とかいうものについて。無論、まともな答えが返ってくるなんて期待していなかつた。ところが、である。

『ああ、しつてますよ』、真顔で返されたのである。

正直、この時ほど鬱根は自分がどういう顔をすべきか迷つた日はなかつたと言つて良い。

あれ？ こういうのって一般人お断りじやなかつたつけ？

それともあれだらうか、この世界では魔法がデフォなのだらうか？

その割には、筈にまたがつて空をとぶ少女や、求人欄に魔法使いを求める広告が載つていなかつたのは何故だらう？

やつぱあれか、それ専門の雑誌か新聞が発行されているのだらうか。そこにしか求人欄はないのかもしれない。

なんだろう、そうだつたら凄く面白そうなのだが。

アホな感想を抱いた中年の思いはあつさりと打ちくだかれた。

ボーイはあつさりといつたのだ。

「工 ターナルの事でしょ？」 日本では何ですか、その名称で呼ばれているのですか？」

「？」

疑問を覚えつつも、話を合わせていくと、何の事はない、オンラインゲームの事だつ

た。

元はアメリカから発信されたらしいのだが、日本、フランス、ドイツ、イギリス、中国、韓国、東南アジアに幅広く展開しているとの事。

設定を聞くと昨日ジャンヌからきいた『聖杯大戦』とうり二つだつた。

(いや、あの時の説明は『大戦』と『戦争』が入り交じつてたつける。まあ、真剣に聞いてなかつたこつちも悪かつたけど)

しかし、その点を除けばほぼ一緒だつた。

『エターナル・ソルダーズ』、直訳すると永遠の戦士達か。

プレイヤーは史実上の英雄達を『セイバー』、『ランサー』、『アーチャー』、『ライダー』、『キヤスター』、『アサシン』、『バーサーカー』、のどれかのクラスに振り分けて召還する。有名な剣を所有していた英雄を『セイバー』クラスにすれば、最適。

英雄ごとにクラスの適性値が決められており、無課金なら素直にそれにしたがつた方が得。

無論、課金でパロメーターをいじつたり、スキルを付け加える事も可能。

また、掲示板ではキヤラクターの武器、防具を募集しており、月一回行われる投票で、高い支持を得た武具は実装されるとの事。

面白いのは能力の高い英雄を召喚できても、それが即勝利に結びつかない点だろう。

プレイヤーと英雄は独立した存在であり、英雄を遠くにやれば、プレイヤーが狙われておしまい。

さりとてくついたままでは、展開次第では他陣営と連続戦闘、集中攻撃を食らいかねない。

アイテムや地形も勝利の鍵となる、他のプレイヤーとの緊密なやりとり、戦略性、洞察力、言うなれば一瞬たりとも油断できない仕組み。

なるほどと関根は頷いた。ぱつと聞くだけでかなりやりこみ要素が高い作品である。手が掛かる反面、自分の絵図通りにゲームを制したり、他プレイヤーをくだすことが出来れば、快感もひとしおであろう。

（うーん、となるとこれはどうなのかなあ）

関根は思つた。ひよつとすると、あの子、レティシア（ジャンヌ）って子はこの『エターナル』主催のイベントに誘われていたのではないか？

その疑念がまたぶり返してきたのだ。

しかし、それならそれで昨日、あるいはさつきロビーで会つた際に、言つてくれれば、関根とて引き留めるつもりはなかつた。

にもかかわらず、何でのの子は大人しくひきさがつたのか？

関根はボーカから『エターナル』のサイト情報を聞き出し、ホテル近くの喫茶店でコー

ヒー片手に調べてみた。

だが、サイトのどこを調べてもイベント情報はあるにはあるが、そこにはルーマニアの名は記されていない。

イベント情報にルーマニアの名があれば、飛び入りで参加して顔を売ろうとしたとか、何か訴えかけるつもりだつたとかの推理も成り立つが、現状それもできそうにない。

そもそもどう考えても遠すぎる。

また、サイトを巡っていて気がついたのだが、『ルーラー（裁定者）』なるクラスは存在しない。

『アヴァンジャー（復讐者）』や『セイヴァー（救世主）』、最近になつて『ビースト』なるクラスが加わえられたのだが、『ルーラー』はなかつた。

ある種当然と言えば、当然の話であろう。

オンライン・ゲームである事を差し引いても、本来『裁定者』として振る舞うのは運営がすべき事柄であつて、それをクラスに加えてしまつては本末転倒。

これではほとんど『運営』が機能停止しています、そう告白しているのに等しい。

この時点では関根は偶然とはいえ、正しく『大戦』の問題点を把握する事となるのだが、あくまで現時点では少女の妄想話とオンライン・ゲームとの繋がりの上としかみていい。ゆえに、

(まあ、いいか)

こういう結論になつた。

ただ、改めてパリの空を見ているとどうにも気になる。このまま放つておくと、せつかくの美術館巡りや美味しい料理に舌包み打つのに差し支えそうだつた。

仕方ない、心中で舌打ちすると関根は立ち上がり、ホテルに戻つた。多分日本のカプセルホテルにもあつたから、あの程度のホテルにもあるだろうと思つたら、案の定あつた。

こつちは金を払つたら三時間ほどノートパソコンを貸してくれるシステム。

『ああ、また余計な散財を』

心中で呻きつつ、関根はノートパソコンを抱えつつ、部屋に戻ると、手取り早くパソコンを起動させ、インターネットに接続する。

さて、次にどうするかと思いつつ、『エターナル』のサイトに接続して……。

関根は驚いた。ログイン出来るのだ。どうも過去誰かがこのパソコンを使って登録し、そのままになつていたらしい。

関根にすればありがたい話しだつた。これで書き込みも出来れば、情報も探れる。

無論、細心の注意を払つて、個人情報を書き込まないようになつて、関根は『エターナル

ナル』の公式掲示板に書き込んでいった。

そこに、何が潜んでいるかなど知る由もなく。

当初から一種の冗談のような口調で書いた。ひょつとして、あのジャンヌ（レティシア）ってこの知り合いがいて、何かしつてるのかもしれない、などと思いつつ、『ルーラー』についてふれてみる。

……奇妙な事に反応はすぐにあつた。

どうも没クラスとして一時取りざたされたクラスだつたらしい。

あまりにも付与されるスキルが反則すぎて、結局お蔵入りになつた、との事。

あるいは特殊シナリオだけに登場するレアクラスとして扱おうという動きもあつたが、それではプレイヤーサイドにいらざる期待や不満（実装はいつかや何だ手に入らないのか等の）を抱かせかねないので、これまた沙汰やみに終わつたという。

ここまで納得のいく話であつた、そこそこまでは。

話が妙な方向にいきはじめたのは、ここから先。

無論、細心の注意を払つて、個人情報を書き込まないようになつた。

そこに、何が潜んでいるかなど知る由もなく。

当初から一種の冗談のような口調で書いた。ひょつとして、あのジャンヌ（レティシア）ってこの知り合いがいて、何かしつてるのかもしれない、などと思いつつ、『ルーラー』

ラー』についてふれてみる。

……奇妙な事に反応はすぐにあつた。

どうも没クラスとして一時取りざたされたクラスだつたらしい。

あまりにも付与されるスキルが反則すぎて、結局お蔵入りになつた、との事。

あるいは特殊シナリオだけに登場するレアクラスとして扱おうという動きもあつたが、それではプレイヤーサイドにいらざる期待や不満（実装はいつかや何だ手に入らないのか等の）を抱かせかねないので、これまた沙汰やみに終わつたという。

ここまで納得のいく話であつた、そこそこまでは。

話が妙な方向にいきはじめたのは、ここから先。

いきなり関根は問いつめられたのだ。曰く。

『貴方はどこでルーラーの情報を得たのか？』

と。

ん？ 聞かれて、関根は少し困つた。

正直に答えたものかどうか、少し悩んだが、まあ良いかと正直に答えてみる事にした。

『どこつて、とある人物から聞いた』

間髪入れずに次の問。

『誰から？』

何やら漂う不穏な気配。

関根はあたりを伺つた。オープンカフェで、今も近くに道行く人々の雑多な声や足音がしている。

そんな日常の風景や音を見て、関根はようやく落ち着いた。
さて、ではどうする？

何だか反応がおかしい、それは傍目にも明らかだつた。

ただのゲーム・只の没クラスに対してもだけでこれ。

別に実装される云々のデマをとばした訳でもないのに。
(あんまり相手にすべきじゃないのかかもしれないなあ)

そう思う反面、気になるのも事実。

どうしようかと思つていると、相手は関根の反応にかまわず続けた。

『貴方はここがどこで、何に書き込んでいるのか理解しているのか？』
と。

……あ、ヤヴァアイと関根は思つた。何かあかん奴に噛みつかれたっぽい、とも。

あるいは一時期日本でも話題になつた元運営のスタッフが、軽率にもゲームや運営元の内部情報を暴露しまくつて問題になつた事件を想起したのかもしれない。
何にせよ、あまり相手にすべきではない。

だが、沈黙したまま退散というのも尻尾を巻いて逃げ出したようで、気分が良くないのも事実。ならば。

関根は相手の言葉に応じず、一方的に書き殴つた。

『舞台はルーマニア。規格外の戦い。世界の危機』

普通にみる限り、頭がおかしい記述にしか見えない。これで引き下がるかと思ったのだが。

反応は早かつた。

『貴方はどこの誰で、どこでそれをしつた?』

……ひょつとして、この人物、あの子（レティシア）の知り合いか何かなのだろうか?

しかし、それならもう少し尋ね方と言うものがあるはずだつた。

事情を語るか? いや、只単に物好きが面白がつて食いついているだけの可能性もある。

それに下手な事をいつてあの子（レティシア）に迷惑がかかつてもいけない。

『聖女様からの情報です』

どこからどう見ても立派な電波さんの物言いである。これで退くかと思つたら、甘かつた。

『では貴方は、聖女様そのもの乃至聖女様の声を聞いた、と?』

勘弁してよ。関根はつくづくそう思つた。

周り見てみなよ、明らかに皆ひいてる……あれ? おかしいな、普通だつたら揶揄するなり、馬鹿にする書き込みが乱舞しても良いはずなのに、全くその傾向がない。(外国のサイトつて随分大人しいのね。日本だつたらこうはいかない)

ズレた事を考えつつ、関根は答えた。

『はい、その通りです。私は聖女様の声を直にききました』

嘘はついていない。まあ、問答の末追い返した訳だが。

さあ、もうこれで話は終了と思いつや、関根は次の書き込みで目が点になつた。だつて。

『是非ともお会いしたいのだが』

『はい? え? これ出会い系のサイトだつたつけ? いやいや、ちょっと待つてほしい。』

この手の書き込みつて原則禁止されているはずでは?

関根がそう思うのも当然だつた。もしかの事件にでも発展したら、どう考へても当局ににらまれるか、良くない噂が立てられる。運営側にとつてそれは致命傷になりかねなかつた。普通だつたら、きちんと取り締ま

るはずであるし、周囲もそれとなく止めるはず。

しかしどう言う訳か、止める気配が全く見えない。

どうしよう？ さつさと逃げ出すか。そう思いつつも、関根はつい馬鹿な思いに駆られて最後の書き込みを行つた。いわく。

『ならば、ループルにおいて、奪うものではなく、与える者になりたかつた御仁の絵の前にて、お待ちしております。期限は二日。時刻は午後二時から四時の間にて』
この謎かけわかるかねえ、まあ、無理だろ。

分かる奴なら、話し程度は聞いても良い。

それが関根の判断だつた。馬鹿な事やつているという気持ちはあるが、この程度のお遊びは許されて良いはずだと自分に言い聞かす。

それが、世界と自身の運命を変える事にならうとは露知らず。

さて、ここでちよつと視点を変える。というか、説明する必要が出てきた。

関根が覗いた『エターナル・ソルダーズ』について、また、その背後の組織についてである。

聖杯戦争そのものといつてよいゲームが世をにぎわせているこの状況、言うまでもなくこれは偶然ではなく意図的に作り上げられたものである。
何故こうなつたのか、その理由の一つとして例の『亞種聖杯戦争』があげられる。

本家本元とは違ひ、手軽で簡単な（？）儀式と化した亞種聖杯戦争は、それこそ世界中で猛威を振るい、ある面では魔術師達の術式展開や理論構築、実践経験等に多大に貢献した。ここまでではプラス面。

しかし、当然の話だが猛威を振るえばふるうほど人目につきやすくなるのもまた事実。これはマイナス面。

しかもかつて冬木で行われていた程度であれば、聖堂教会の一手で処理も可能だつたが、事が世界中に拡散されるとそうも言つていられなくなつてきた。

予算もかかるし、人員も派遣しなければならなくなる。

しかも、それだけやつて聖堂教会になにか実入りがあるのかといえば、何もない。

最初の内こそ『おつき合い』や『組織間の相互理解と協力態勢構築の為』とお題目もたてて何とかやつてこれたが、徐々に聖堂教会内部で不満の声があがるのも無理ない話であつた。

『冬木の大聖杯ならいざしらず、偽物の馬鹿騒ぎにどうして聖堂教会がつきあわねばならないのか？』

『我々聖堂教会は魔術協会の下部組織ではない。後始末や隠蔽等の問題はそれこそ魔術師達本人が率先してやるべき事柄ではないのか？』

大都会で行われるのならば、利権やら土地の有力者に顔を売れる等のイベントもある

のだが、『神秘の隠匿』というお題目を守らんと欲するなら、龍脈等考慮しなければならない問題を加味したとしても、田舎でやるのが相応しいという話になる。

日本で例えるなら、京都市と大阪府の間、住民すら自分たちは京都に属してるとか大阪に属しているのかよくわからない中途半端な所が一番という話になる。

風光明媚……だろう。空気も美味しい……はずだ。

でも観光名所と呼ばれるものは何一つなく、それが目的でいくわけではないのだが、行つて何するかと言えば、他人がやらかした後始末。

しかも大抵の場合やつた奴は後始末を手伝わずにそのまんまとつか行つてしまふ。

これで聖堂教会側に不満がたまらなければ、それこそどうかしているといえた。

かくて『聖杯大戦』が行われる前に、聖堂教会側は魔術師達に強硬な申し入れを行う事となる。曰く。

『あのさ、お願いですから、あの馬鹿騒ぎ（亞種聖杯戦争）、もうちよつときちんと制御してくれません？ ねえ？』

平たく言えば『お前等、魔術師側も金と人員出せや、こらあ！』である。

流石にこの剣幕に魔術師側も何らかのアクションを行う必要性は感じられ、かくて一時的な情報拡散と統制処置が執られる事となつた。

それが『エターナル』である。

『聖杯戦争』に似たゲームを世に送り出し、そこを基盤として『亞種聖杯戦争』をとり行う場合は、必ずここに登録を行わなければならない、もしその規約を破つた者は、立場、貴賤関係なしに処罰の対象となる。

かくて発展著しいソーシャル・ネットワークを通じて、魔術師達は『亞種聖杯戦争』の掌握にかかり、と言うわけだ。

が、これら一連の発起人とも言うべき時計塔は、どことなく本件に及び腰だった、否、こう表現すべきかもしれない。

『今一つ己のやつている行動をよく理解していなかつた』

と。

言うなれば、本音の上では魔術師達は聖堂教会を、こと『亞種聖杯戦争』に関する限り、下部組織とはいかないまでも便利な掃除屋と見なしていたのである。

このような事情から立ち上げられた『エターナル』及びその運営元にろくな人材、資材、資金が与えられなかつたのも、ある面ではやむを得なかつたとさえいえる。

どうも当時の記録を見る限り、時計塔もアトラス院も、三年か長くても四年ほどで『エターナル』から手を引こうかと思つていた節がある。

『聖堂教会から文句を言われたので、一応やつています』という格好を付ける必要がある。三年か四年後、龍脈把握と願望機起動方法の徹底解明を押し進め、完全に亞種聖杯戦争

は時計塔の管理下に置かれる』

これが残された資料から伺える時計塔の『亞種聖杯戦争』解決策だった。
ところが、事はそう簡単に行かなかつた。

まずもつて『エターナル』が想像以上の成功を収め、勝手にスポンサーを募り出した
のである。不思議な事に当初時計塔側はこれを黙認していた。

元々ソーシャル・ネットワークの意味をよく理解していなかつたので、独自に資金繰
りを行う事で、組織面で独立して貰つた方がありがたいという空気が支配的だつたの
だ。

配置されている人間は腐つても魔術師、それも時計塔、アトラス院、彷徨海の雜多な
寄せ集めだつた。

これは時計塔出身者のみで構成しては、時計塔のみ優遇する方向にいかせぬ措置だつ
たが、終わつてみれば無駄な予防策だつた。

集められた人間達は自分たちが厄介払いされたと理解しており、同時にここで何をし
たところで評価もされないとわかつていた。

『所詮、窓際、聖堂教会相手の言い訳としてでつちあげられた組織』

本命がどこにあるのか、彼、彼女らは百も承知だつた。
だが、『エターナル』の成功が流れを変えた。

独自で資金繰りを可能になつた彼らは、密かに『亞種聖杯戦争』に手を突っ込んでいた。

言うまでもなく『亞種聖杯戦争』は、術式や確保出来る聖遺物の関係から、地味な催しへといった。クランの猛犬、騎士王、征服王、英雄王といった煌びやかな英雄達を呼び出す事は実質不可能。

だが、そうならそうとやりようはあつた。

ここで打ち捨てられた彼らが注目したのはネットの世界で生み出された一つの伝承。

『スレンダーマン』

である。

もとは掲示板にアップされたひよろ長い顔のスースを着た怪人物。

何をしたわけでもない、ただ悪戯で作り上げられたこの怪物はネットを中心に広がりを見せ、あろう事か現実に見たと証言する人が多数でたのである。

曰く、見たら呪われる。子供を誘拐する等々。

そんな能力は創造者すら想定していなかつた。にも関わらず、『スレンダーマン』は勝手に能力が付け加えられて行つたのだ。

彼らはこれに目を付けた。

アメリカで行われたとある『亞種聖杯戦争』において、彼らは密かにこの『スレンダー・マン』を召喚し、見事最終勝者にのし上がる事に成功したのである。他の参加者の英靈が二、三流であつた事、組織的バックアップがあつた事も事実だが、近代のそれもネットを通じて作り上げられた幻影が、本物の英靈に伍する事ばかりか、勝利すらして見せたのである。

この勝利をもつて、彼らは高々とその名を名乗るようになつた。

アメリカを拠点とした『新大陸派』の結成である。

この動きに時計塔、アトラス院、彷徨院が激怒したのは言うまでもない。

本来聖堂教会相手の言い訳組織、対『亞種聖杯戦争』用の掃除屋が、何をトチ狂つたのか独自組織を名乗り出したのである。

本来ならばユグドミレニアよりも先に潰されても文句言えないはずだつた。が、ここでものをいつたのが『新大陸派』が抱える特殊な武器。

彼らの拠点たるアメリカ大陸のもつマンパワーである。

元来これは大した武器になり得ないはずだつた。

知つての通り、元来これは大した武器になり得ないはずだつた。

そしてこれまた、魔術師の要は魔術回路にある。

代を得て、血を混ぜ合わせる事によつて発展していくそのあり方は、通常なら数多く

人がいればそこから特異の天才を生み出る事があり得るという常の法則を覆すものだつた。

だが、ここに『亞種聖杯戦争』という一要素が絡んだ瞬間、話は劇的に変化した。なるほど、本家本元に比べるならば、最大でも英靈五騎しか呼べず、万能の願望機なんぞと呼ぶのも烏滸がましい代物かもしれない。

しかし、だ。それでも勝ち上がり最後の一人になりさえすれば、魔術回路の本数追加や魔力の質的向上、身体強化程度ならば通常の魔術師が一生かかつても得られるかどうかわからない成果も、簡単に引き出す事が可能だつたのだ。

下手をすれば現行の魔術師達の制度や体制を崩しかねない異形の研究。

『新大陸派』はこれを武器にして、魔術協会側にとある申し入れを行つた。

それは他でもない現行体制の刷新、もつと言つてしまえば『新大陸派』の権利確保と参入であつた。

というのも、『新大陸派』はその母胎となつたのは言うまでもなく時計塔、アトラス院、彷徨海の各陣営からの寄せ集めだつたが、発展過程でのし上がつてきたのはアメリカ出身の魔術師達が多かつたのだ。

数は多けれども正当な評価を受けられない、理論面では常に時計塔、アトラス院、彷徨海の後塵を拝している。

彼らはそれが我慢ならなかつた。

たまに人材が先の三つに呼ばれる事はあれども、それらは全て吸収されてしまい、古巣のアメリカには帰つてこない。

そりや、正当な評価も理論も遅れがちな古巣にいるより、本場で力を発揮した方がよほど良い、そう判断するのも当然だろうが、中には実力を認められながらも、地元愛に駆られて残つている連中も確かにいたのだ。

彼らの全員がこう思うのも無理なかつた。

『面白くない』

と。

あるいは、

『これじやあ、大企業の下請けか、何時までもこき使われているパート・アルバイトと立場が変わらないじやないか！』

と。

『新大陸派』にとつて幸運だつたのは、ちょうど折りよくユグドミニニアが魔術協会から離反してくれた事だつた。

おかげで、魔術協会、具体的には交渉窓口となつた時計塔は、かなりの面で『新大陸派』に譲歩せざる得なくなつたのである。

もしここで強硬策にて『新大陸派』まで離反しては、各地で起きている『亞種聖杯戦争』の始末ばかりか、『新大陸派』にまで戦力を向けねばならなくなる。

これでは仮に無事に全ての方がついたとしても、時計塔、アトラス院、彷徨海の三陣営で政変が起きるのは確実であり、まず持つて時計塔の現責任者三人の首は飛ぶ事となるだろう。

かくて、『新大陸派』は暫定的とはいえ魔術協会内部における第四の地位、独自の権力基盤と時計塔、アトラス院、彷徨海からの有力講師招聘の権利を獲得する事に成功したのであつた。

ただし、今のところ出来てここまでである。

先に挙げた『亞種聖杯戦争』を通じての身体強化云々は、下手をすれば魔術師達の秩序そのものを突き崩すばかりか無茶苦茶にしかねない面がかなりあるので、おおっぴらには振り回せないし、どんな副作用があるのかどうかもわからない以上、慎重に取り扱う必要があつた。

また、『新大陸派』も心得ていた。

現状ここまでもちこめたのは、あくまでユグドミレニア離反に伴う一時的な優位状態にすぎず、タイミングがズれていれば、自分たちこそ真っ先に肅正対象になつていたと言ふ事を。

そしてこういった形で魔術協会と妥協が成立した以上、少なくとも表立つては今時のユグドミレニア離反には、関われないと、いう事も。

ただし、では何もしないのが正解と言えるのかと言えばそうでもなかつた。

どのような状況であれ、手札、すなわち選択肢は多いにこしたことはないのである。それでなくとも形の上では『新大陸派』は『亞種聖杯戦争』を通じてここまで大きくなつた組織なのだ。

本家本元の、まごうことなき大聖杯と本物の大英雄達の激突。

『見たい！　何としても！』

そう思うのも無理はなかつた。

だが、先に述べたとおり人をやるのははばかられる。

さりとて事が終わつての後、時計塔の広報が述べ立てるゴテゴテに飾りたてられた自己宣伝まみれの戦闘詳報なんぞ読みたくもない。

これは仮にユグドミレニア側が勝つても同じ事だろう。

読んでみたいのは虚飾を廃した、ひたすら事実に即した文章乃至映像なのだ。

自陣営の人はやれない、買収は可能だが、どうせその程度の小物では得られるものはたかがしれている。

中立でなおかつ両陣営を行き来でき、参加者の誰にでもインタビュー可能で、虚飾を

述べない人物。

どう考へてもそんな都合の良い人材なんぞいるわけがない。

普通ならそう考へる所、『新大陸派』は『亞種聖杯戦争』を通じて、一つの噂話を蒐集していた、曰く、

『ルーラーなる特殊クラスが存在する。出現する条件は不明だが、世に言う聖人が顕現し、サーヴァントを御する能力を持つ』

とある『亞種聖杯戦争』時に出現したとあるが、詳しい事はわかつていな。

だが、もはや『新大陸派』がすがれるのはこれしかなかつた。

そんな彼らに確かに天は微笑んでくれたのである。

これも偏に亞流とはい『聖杯戦争』に関わり続けたご褒美だつたのかかもしれない。

こうして彼らは運良く関根の何の気なしにかき立てた情報に飛びつく事となる。

どこから発信されたものか即座に解析、フランス、それもパリ。

だが、そこで彼ら『新大陸派』は頭を抱える事となる。

ここから先はどうするのか。問題はそこだつた。

実の所、関根の所在は結構簡単に把握できていたのである。

ログインしてきた時間とIPアドレス、ついでにそこここに張り巡らされた監視カメ

ラを付け加えれば、今日日大抵の人物の行方は迫える。

『新大陸派』の強みは『亞種聖杯戦争』を通じて各地の行政や政府と太いパイプがあり、ここでそれがものをいったといつて良い。

じゃあ、さつさと会いにいけば良いではないか、そういう話になるのだが、ここで『新大陸派』はやらかしてしまった。

関根が言い立てた例の判じ物、『奪う者でなく、与える者になりたかつた御仁の絵の前にてお会いしましよう』とかいう、これに反応してしまったのだ。

『やつぱりさあ、こういうのつて解いた上で会うのが正統なんじやないの?』

『言えてる。IPアドレスと監視カメラ使つて居場所特定つて、その』

風情もへつたくれもないじやない。

後になつてみれば、頭おかしいのではないかと言われても文句が言えない発想なのだが、この時『新大陸派』は真剣にそう思い、挙げ句この判じ物を幹部クラスのみならず、下の者にも公開し、意見を求めたのであった。曰く、
『解けた人物に会いに行かせる』

と。

後日、『新大陸派』の幹部は頭抱えつつこう呻く事となる。

『あれ? 何で俺達あんな馬鹿な事やつちやつたんだろう?』

その場のノリと勢いで話し進めるところくな事にならないと言う良い証明。で、それだけでなく解けた奴がでたのはいいが、そいつの説明を詳しく聞かずに入出したのである。

『いや、だつて自信満々だつたし』
聞いてさえいれば、あるいは後の事態は避けられたのかもしれないのに。

一応断つておくと、この人物、『新大陸派』幹部の一人、マンフレッド・オマーンは確かに関根の判じ物を解いて見せたのである。

そして見事に接触する事に成功はした。
で、どうなつたのか。
次に語るはその話し。

『新大陸派悪夢の夜（実際の会談時刻は昼頃）』、『新大陸派黒歴史ナンバー1』の顛末について語るとしよう。

第三章 ルーヴルにて歌え人間贊歌

(やつぱりいないか)

関根はその絵の前にして、ほろ苦い笑みを浮かべた。
まあ、予想通りといえた。

『奪う者ではなく、与える者になりたかつた御仁の絵』

ルーヴル美術館、そこのある絵の前に関根はたつていた。
大きな絵であり、今も人通りが絶えない。

有名な絵である事は間違いない。

で、一日目は誰にも声をかけられなかつた。

二日目も今も同様。まあ、関根とて期待していたのかと問われれば、かなり微妙だつたのだが。

(まあ、しようがないよね。そんなものだし)

につっこり笑つて、関根は深々と頭を下げた。申し訳ございませんでした。
どうも通じなかつたご様子……ん?

その瞬間、関根は異常に気がついた。

その絵の前は通路になつており、人通りが絶えないはずなのに、その瞬間、まるで申し合わせたかのように人通りが絶えたのだ。

あり得ない、最初関根は

『何かの催し物かお偉いさんの視察でも予定されてたつけ?』

と思つたが、それだつたら事前通告されてしかるべき、あるいは係りの者が関根に注意をしてくるはずだつた。

にもかかわらずここに至るもそれがない。ということは、まさか。

関根がそう思つたまさにその瞬間、カツーンと聞こえよがしの靴音がした。

ルーブルほどの格調高い美術館では不作法に値する気がしないでもないが、演出としてはなかなかのもの。

関根はそう思いつつ、足音がした方向に目を向けた。

やつてくるのは紺のスース。

褐色の肌に銀色の髪、顔立ちは嫌みなほど整つている、のだが、何だろう、胸につけている天道虫のブローチ(かなり大きい)で、かなり大損こいでいるような印象があつた。

いや、もつと言つてしまえば、関根は妙な親近感すら覚えたと言つて良い。

そしてその印象は間違つていなかつた事がすぐに判明する。

男は気障つたらしい笑みを浮かべ、次いで優雅に一礼して見せた。

「お初にお目にかかる。自分はマンフレッド・オマーン。『新大陸派』の幹部をつとめている者」

（『新大陸派』何それ？）

またぞろ、何だか嫌な予感がした。

（いや、ひよつとして例の『エターナル』の運営かイベント委員がそう名乗つていて可能性が……）

だつたら、サイトのどつかにそれが載つてなきやおかしいよな、うん。

思いつつ、そういえばと関根はそれを口にした。

「その様子から察するに、俺が出した問題の答えはしつかりと解いていただいたようで。しかし、当てずつぽうの可能性もある。何と言つてもこの絵は有名だからね。

さあ、答えをどうぞ。貴殿は何を持つて俺が出した謎を解いた？」

謎もくそもない。こんなもの、あれを読んでいれば答えはズバリ書いてあるのだから

ら。

『ああ、俺はこれになりたかつたのだ。

奪うものではなく、与えるもの』

マンフレツド・オマーンは気障つたらしく右手を己の髪にやり、見事なまでのドヤ顔で言つた。

「ふつ、愚問なり。

長谷川哲也著、『ナポレオン 覇道進撃』第四巻にしつかりと書かれている！ この絵の事が

そう、それこそがかの有名な

『ナポレオンの戴冠図』

パチパチパチ、関根は拍手で持つてその男、マンフレツド・オマーンを迎えた。

まさかこんな所で同好の士に出会えようとは思わなかつた。

半ば以上それを期待しての謎かけだつたが、こうも鮮やかにつれるとはちよつと思つていなかつたのも事実。

さて、問題は一体どんな話が聞けるのか、そしてこの周りで起きている異常事態は何なのかな。

関根は笑顔を絶やさぬようにしつつも、注意と警戒を怠らなかつた。

で、ちよつとここで視点を移す。

いやあ、関根視点だとちよつと面白くないので。

この会見、しつかりとライブ中継されていたのである。

やつていたのは言うまでもなく『新大陸派』。

人払いの結界を張ったのも、言うまでもなく彼ら。

で、現在進行形のこの会談は、彼らにとつて歴史的会談になるはずだつた。しかし
……。

のつけからけつまずいた。そう評するのが妥当であろう。

ここら辺、ニコニコ動画でコメントが流れている光景を思い起こしつつ読んでいただ
くと良いと思う。

『え？ 何？ 長谷川哲也？ 誰？』

『ナポレオン 翡道進撃！ 日本の漫画じやねえか！』

あ、何か嫌な予感がした、とはとある『新大陸派』幹部の後日の台詞である。
だつてそうであろう。

ルーヴルである。おまけに何かしら意味ありげな謎かけである。

それだつたら、普通ルネツサンス期の巨匠、ミケランジェロやダンテ、ダ・ヴィンチ
の諸作品にまつわるものと想像したくなる。

いや、そこまでいかずとも聖書関係の作品でもまあ許せた。

ナポレオン・ボナパルトの戴冠図。

うん、まあ、悪くはない、悪くはないのだが、長谷川哲也とはなんぞや？ おまけに

日本の漫画？

『おい、こいつ本当にルーラーなのか？』

何か違う気が。

いや、また、これは何かの壮大なメッセージの可能性も。
まあまあ、ここは一つマンフレッドに任せて。

様々な思いを乗せつつ、話は進んでいく。

そこから先の話は『聖杯大戦』の話であり、参加者のプロフィールやら、出来れば詳細な戦闘報告やユグドミニニアや魔術協会から派遣された連中の動きを仔細に調べ、記録してほしいという依頼について。

相手の人物、『関根敬一郎』なる人物は、右手を口元に手をやりつつ、要所要所で頷くばかり。

落ち着いた態度といつてよく、見ている人々も、

『至つて普通だな』

『ある程度事情は承知しているみたい』

と割と好感触。

で、一通り説明が終わり、関根は言った。

『依頼を受けた場合、資金提供等はあるのか？』

と。

これはかなり微妙な問題だった。知つての通り、本来ルーラーは局外中立を旨とする。

特定陣営から金銭授与を受ければ、どうあつても疑惑の目で見られかねない。
しかしこの点、『新大陸派』に関する限り、クリア可能である。

マンフレッドもその点を説明し、関根もあつさりと了承の意を示し、ここに平和裡に
話し合いは終了するかと思われたまさにその時、マンフレッドが仕掛けた。

『一つ、関根さんといったか。俺は貴方に疑惑の念をもつてゐる！』

おおっ！ やっぱり！

良いぞ、その通りだ！

贊意の声があがる一方、了承をしてもらえたのだから、下手につつくのはまずい、勇
み足だと危惧の念をこぼす者も。

だが、矢は放たれたのも事実。

どうなる！ 固唾をのんで見守る中、マンフレッドは言った。

『こう言つては何だが、貴方の気配はいかにもそこいらにいる一般人と変わらない。こ
れで裁判者などと名乗られても、困惑を感じるもの事実』

よく言つた、うん、その通り！

若干賛同の声が大きくなる。

マンフレッドは続けて言う。

『だから普通に考えるならば、何かしら能力なりスキルなどを見せてほしい、ここはそういう場面なのだろう』

うんうん、いいよいよ、まさしくその通り！

ここまでよかつたのである、だが次の瞬間、マンフレッドは何をいつたかと言えば。

『だが、俺は同時にこうも思うのだよ。果たして能力やスキルなどというものは重要なのだろうか、と』

ん？　ちよつと待て、こいつ何を言い出す、能力やスキル重視しなくて何を重視せいと？

この瞬間、背中に悪寒が走つたと、後日幾人の人が証言している。

『俺はそんなものには興味がない。いかなる優れた能力、スキルを持とうとも、気高い精神性を持たなければ、そんなものに意味はない！　そう考えるがゆえに！』

おい！　誰かこいつを止めろ！

もはや絶叫ではすまない悲鳴がそこかしこで叫ばれる中、マンフレッドの対面の閻根は言つた。

『その口調から、察するに君はあれど、ジョジョの奇妙な冒険（荒木飛呂彦）の』

『そうだ。俺はかの作品の信奉者と言つていい！』

誰だ、こいつの派遣決めやがった馬鹿は！

お前だつて賛同しただろうが、今更他人事みたいな面すんな、この野郎！

外野のわめきはもはや止めようがないほど拡大していく中、マンフレッドは言う。

『言うまでもなく、あの作品を貫くテーマは「人間贊歌」に他ならない。貴方がそれを正しく理解しているのならば、何でもいい！ それを示して見せろ！ だが、言うまでもなく「ジヨジヨ」を使用する事は禁止する！』

ねえ、誰かこいつに今手前の言動と行動全て中継されてるつて言う、肝心要の事伝えてくれない？

もはや『新大陸派』は別の意味で壊滅しそうな勢いであつた。

誰がどう考へても、この瞬間、関根敬一郎という人物の底を見るより、自分たちの評判の方が地に落ちるのが早い、誰がみてもそう思つたまさにその時！

カツンっと甲高い音を立てて、関根は前にでた。

え？ もういい加減自分達の目と耳を疑うのも飽きてきた外野の人々をあざ笑うように、関根敬一郎はマンフレッドに向けて歩を進める。

『ほう、向かつてくるか。てつきり距離をとつて、終了間際の受験生みたく必死こいて粘

ると思つてのだが』

『関根、いつの間にか口元にやつていた右手をおろしポケットの中に。
そうして言う。

『近づかなきやテメーはぶつ飛ばせねえからなあ』
『ふつ、なら存分に近づいてくるが良い！』

なあ、これ一体何が始まつてんの、ねえ。

もはや完全に先生、お願ひ、見物人の人達が息していないの、状態。

そんなもん完全無視して関根とマンフレッドの戦闘（？）は開始される。

当然、最初のかけ声は、あれだ。

『無駄無駄無駄無駄無駄！』（マンフレッド）

『オラオラオラオラオラ！』（関根）

言うまでもない話だが、双方スタンドを展開
している訳ではない。

怒鳴つてるだけ。傍からみる限り、頭のおかしな二人が大声でわめきあつてているよう
にしか見えない。

しかし、ああ、ある意味当然と言うべきかやつてる当事者達は真剣そのもの！
『人間贊歌。いくぜ、題は「ドラえもん」！』

関根の言葉に、マンフレッドは大げさに肩をすくめていう。

『ほうつ、「ドラえもん」！なるほど、知名度においては、ジヨジヨに勝るとも劣らぬ作品だな。感銘を受ける長編も数多い。それで、「ドラえもん」の何を語る』

『俺が語るのは「ドラえもん」ではないぜ。それに命を吹き込んでいる声優さんについてだ』

『ほう、これは興味深い。そういうえば、貴方は日本人だつたな。俺は常々聞いてみたいと思つっていたのだよ。あの交代劇をどうおもつてているのか、と』

『「ドラえもん」と聞いて最初に鼓膜に蘇つてくるのはあの御仁の声であろう。

暖かくて、そのくせ独特の癖があつて、あの声になれきつた者にとつては、「ドラえもん」とあの御仁はもはや一体といつても過言ではなかつた。しかし。

『人は年をとる。かつては出せていた声や演出も、体力的な問題や病氣から出来なくなる事もある。それを無視して第一線にたたせ続けるのは、当の本人にも周りにも良くないことじやねーのか』

『しかり、しかりと答えよう。しかしだ。あの選択はどうなのだ？　日本にはカンイチ・

クリタという素晴らしい例があつたというのに』

『無駄あ』という台詞と共に、何故か関根がのけぞり、後退する。

久しぶりに見物人からコメントがきた。

『おい、いつまで続くのこの茶番劇』

外野ではもはやルーヴルを爆破したいと言い出す始末。

『ぐう、まさか栗田氏の事をしつてはな』

関根は呻く。補足しておくと栗田貫一氏は、現ルパン三世の声を担当している声優さんだが、元は物まねとしてやっていた。

あまりに上手かつたため、前任者が『もし自分がなくなつたら、後任には彼を』と冗談混じりに語り、後にそれが実現した希有な例。

また、栗田氏も後に「自分は後釜と言うより前任者のまねをあくまで続けている、そういう気持ちで演じている」と語っている。

まさしく日本の声優業界が生み出した傑物の一人と呼んで過言ではあるまい。うん。『クリタ氏の例がある以上、備えておくことは出来たはずだ。よりもよつて』（マンフレッド）

『あれはない、か。一理あると言えなくもない。だが、俺はそうであるがゆえに、あの人を支持すると答えるぜ』（関根）

『ほう、それはまた何故?』

『何故つて、一体あの人の後任に一体誰を持つてくれればいい？ 誰なら納得がいく?』

『むつ、それは』

『ああ、そうだ。誰であろうと納得がいかない。「ドラえもん」の声はあの人しかいない。そう考える奴が大半だろう。俺だつてそういう気分だ』

マンフレッドは沈黙。畳みかけるように関根は続ける。

『言うなれば誰であろうと批判された事だろう。あれはもう「ドラえもん」ではない、そういうわれてな』

『オラツ』関根のかけ声と共に、今度はマンフレッドがのけぞる。

関根、更に追撃。

『そんな事は、少し想像力を働かせねばわかる話だつた。誰だつて、批判されるよりは受け入れられたい。作家や漫画家が代表作と言われる作品を書き上げる事に喜びを感じるようにな』

声優にとつてみれば、『あの作品の、あのキャラクターの声はあの人しか考えられない』、そういうわれるのは最大の賛辞だろう。

『批判される事を覚悟の上で、それでもあえてあの人物は「ドラえもん」の声を引き受けた。マンフレッド・オマーン。こいつはどうだ、荒野を切り開く精神の気高さじやないか！』

なんだそれは、見物人の悲鳴と同時に、マンフレッドが崩れ落ちた。

あたかも全力で殴り合つた、そう言いたげな顔つきをしつつ、マンフレッド・オマー

ンは言つた。

「最後に一つだけ、聞かせてくれないか。お前にとつてあの人は……」
関根は少し目を伏せていった。

「……先に言つたことは、まぎれもなく俺の本音だ。だが、それとは別に思うところはあるぜ。できるなら、そう許されるならば」

死ぬまで、あの人の声で『ドラえもん』を見てみたかつた。
それを聞いた瞬間、マンフレッドは心から納得したといわんばかりに、笑つた。決着、完全に決着！

いや、ちょっと待て何かおかしい！　金渡すの待つた！

『新大陸派』の幹部達は狂つたようにマンフレッド・オマーンの携帯に電話をかけたが、マンフレッドはそれをことごとく無視。

『素晴らしい精神性だ！　彼になら全幅の信頼が置けるし任せられる！』

何をどうとればそういう発想と結論を抱けるのかわからないが、マンフレッドはあつさりとクレジットカードと白紙の小切手のはいつたアタツシユケースを関根に渡し、晴れ晴れとした顔でルーヴルを後にした。

……うん、この日を境に『新大陸派』は胡散臭い、怪しげ、関わりあいにならない方が良い集団という評価を受ける事となる。

さて、関根敬一郎はと/or。

(何だつたんだろう、あれは)

RPG風に例えるなら『関根はアタッショケースを手に入れた』訳である。何あんな事をしたのかと言えば、『金錢援助』という単語に心引かれたからに他ならない。

そう、それ以外の他意はない。喜んでやつていたように見えるとか、ノリノリにしか見えなかつたというのは、全て演技である。

いいね、と関根は誰言うともなしに胸の内でつぶやきつつ、戴冠図に一礼しそそくさとその場を後にした。

これ以上、ここにとどまつてるとナポレオンヒルイ・ダヴィッド（戴冠図の画家）にどつかれるような気がしたので。

で、ホテルに引き返した関根は、改めてアタッショケースをあけてみた。

入つていたのは限度額なしのクレジットカード、白紙の小切手、でもつて参加者のプロフィールとかかれた紙の束（サイズA4）。

……いやな予感はしていたのである。

ここ何日か立て続けに聞いた妄想話。

随所で展開される奇妙な光景、明らかに会話内容が他者には違つて聞こえ、ルーヴル

ではあんな馬鹿な光景を繰り広げても誰も何も言わなかつた！

いや、それでもと、関根は淡い期待を抱いていた。

プロフィールには『八枚舌』とか『疾風車輪』とか『銀蜥蜴』とか、間違つても名刺に書きたくないあだ名が続々と載つてるのである。

『うん！ ゲームだね、これは全部あれだ。ハンドルネームの類に違いない！』
である以上、このクレジットだつて、あれだ、きつと使えないに違いない、そうさ、そ
うに違いない！

冷静に考へるなら、妄想少女がルーマニアにいつて世界に危機に直結しかねない魔術儀式に参加しなければならないとほえて、多分大抵の人は笑つて肩を叩いて帰るよう諭す所だが、大の大人が出所不明のクレジット使つたら、どつからどう考へてもアウトである。

先に少女が口にした説明をした所で、頭がおかしいと思われて、即座に警察にご厄介だらう。

そういつた意味では、ある種関根も覺悟を決めていたといつて良いのかもしれない。

そうして予想通り、あつさりとクレジットは使用出来た。

関根が泣きそうになつたのは言うまでもない。

まさしく、進退窮まつたと言うべき状態。

さて、どうしたものだろうか？

関根はロビーにコーヒーを頼み、顎をなでた。

第一案、まずもつて先に別れた少女、レティシアの前にでて、土下座する。無難な案ではある。別に関根は悪意があつてあのような事をした訳ではないのだから、根気と誠意を持つて真摯に謝れば、許してもらえる可能性は高い。

ローリスク・ローリターンとよんでもよい。

何の制約もなかつたら、関根は躊躇なくこの案を選んだ事だろう。だが、現状はまずい。有り体に言つてこれはチャンスであつた。

上手くいけば大金を手に入れられるかもしないのだ。

それを考えると、あの少女に土下座してしまえば、それを自ら棒に振る事となる。

第二案、クレジットと小切手もつて逃走。

論外、一時的には良いかもしれないが、早晚ばれる。クレジットの使用場所と時間を調べられれば、たやすく居場所は突き止められるし、小切手も手を回されたらそこでおしまい。

天国の後には八つ裂きの地獄が待つてます、では楽しめるものも楽しめない。

第三案、一時的にあの少女の代役を務める。

ハイリスクだがリターンも大きい。

また、有利な点もある。渡された資料によれば、この『聖杯大戦』とかいう催し物は、根っこをたどればユグド何とかとかいう組織の独立騒ぎが原因との事。

どうみてもこの連中が何かしら反則行為を起こしそうな気配が濃厚だつた。大方叩けば埃が出るはずである。それを針小棒大に言い立てれば格好は付く。必要とあらば挑発的行為と言動もありと言えばありだつた。

軽く襲いかかってくれるようならば、なおありがたい。

あの少女に対しても『危険な匂いがしていたから、自分が先に立つた』云々の言い訳になる。

そうして程々の所での少女とバトンタッチすればいいのだ。

こうして名目上でも実績面でも『補佐役』として認知されれば、怖いものなどない。後は大人しく後ろに引っ込んでいいのだから。

方針は決まつた。関根としては、これで美術館巡りを打ち切らねばならないのは残念の極みだつたが、大金が手に入る当てができたのだ、どつちを優先させるべきかは、考えるまでもなかつた。

関根はスマフォを操り、さつさとルーマニア行きの飛行機の予約を行う。

この時点で、関根は楽観論に支配されていたといつて良い。

渡された資料や、例のジャンヌ・ダルクの主張を聞く限り、関根が（勝手に）代役を

務める『ルーラー』なる役は、審判役との事。

どこの世界に、審判役に喧嘩を売るアホがいるものか。

それっぽい顔つきをしつつ、要所要所でメモをとり、金をくれた『新大陸派』に渡す。楽なものだよ、関根がそう思うのも無理なかつた。

もしこの先待ちかまえている苦難と、自分に押しつけられる称号を知つていれば、間違いなく関根はこの時点でのジャンヌ・ダルクに土下座する道を選んだ事だろう。最初の洗礼はルーマニア行きの空の便。

そこで関根は早くも自分の決断を後悔する事となる。